

1

(にしていりゅうかんせんようすいろ・えんどうぶんすいそうぐん)

西天竜幹線用水路・円筒分水槽群

所在地

上伊那郡辰野町、箕輪町、南箕輪村、伊那市

築造

大正8年～昭和14年

管理者

上伊那郡西天竜土地改良区



この水路が造られる前は、養蚕で生計を立てていた当時の農家の人達には「自分達が食べる米は自分達で作りたい。」という強い思いがありました。しかし、井戸からは飲み水程度しか出ず、低地を流れる天竜川から水も引けず、長い間水不足で悩んでいました。

そんな中、大正8年から昭和14年にかけて、岡谷市川岸の天竜川より取水し、辰野町から伊那市に至る天竜川右岸段丘上全延長約25kmに及ぶ幹線用水路を造る工事が実施されました。併せて開田が行われましたが、そのほとんどが人や家畜による作業だったので、水田の水持ちが悪く、水争いが絶えませんでした。そこで水の配分管理をするために造られたのが円筒分水槽です。水田の面積に応じた穴の数により公平な水の供給ができるようになりました。

その後、ほ場整備等が行われたことや土地利用が変化してきたことで、円筒分水槽の数は減ったものの、今でも水供給の役を担っています。

現在の円筒分水槽の設置数は約35基。これは、全国最大規模の円筒分水槽群であり、平成18年度には土木学会選奨土木遺産に認定されました。

3

(ひがしていりゅう・でんべいいきょうようとうしゅこう)

東天竜・伝兵衛井共用頭首工

所在地

上伊那郡辰野町

受益面積

143ヘクタール

築造

昭和2年

取水量

1,223トン/秒

管理者

辰野町東天竜水利管理組合、下辰野区

東天竜用水は1856年、伝兵衛井筋は1859年にそれぞれ全線開通していました。しかし、昭和初期に西天竜幹線用水路の開発計画が浮上したことから、今後の用水不足が想定されるため、昭和2年に共同で取水する頭首工が建設されました。その表面は自然石を配置したコンクリート製の固定堰で、提体は上流側方向に強くカーブしていることから、流れる水と周囲の景観が一体化して美しい景観であり、日本の近代土木遺産（現存する重要な土木構造物2800選「土木学会」）に認定されました。



6

(ろくどうのつつみ)

六道の堤

所在地

伊那市美篤笠原

貯水量

42,000トン

受益面積

約34ヘクタール

築造

嘉永元年(1848年)

管理者

伊那市美篤土地改良区



嘉永元年(1848)高遠藩主、内藤頼寧(ないとうよりやす)は六道原の開墾を行いました。計画は野笹村（現在伊那市高遠町長藤）の藤沢川から取水し、鉾持栈道(ほこじさんどう)脇をトンネルで通過させ、芦沢に出て笠原を通り、六道原に至る約10kmの新しい水路を造るものでした。同年3月に着工し、わずか半年で完成しました。当初は六道の堤の建設予定はなく、工事中に上大島の名主、利右衛門等から六道原開発の要求が出され、それが六道の堤の建設、ひいては末広村（現在の美篤末広）の開発に繋がりました。工事は嘉永2年に始まり、同4年9月に完成。末広の名は、頼寧が命名したといわれています。「まぼらいな いいとこ 百選」に認定されています。

堤には、漂白の歌人と言われた井上井月(いのうえせいげつ)が六道の堤を詠んだ「どこやらに鶴(たず)の声聞く霞かな」の句碑があります。

9

(なかたぎりい)

中田切井

所在地

駒ヶ根市中田切

築造

明治5年～明治7年

管理者

中田切井水利組合



駒ヶ根市の中田切川左岸側は、段丘が急なために取水が困難で、そのうえ取水権は完全に田切村（現飯島町）で持っていたことから用水路建設はできませんでした。中田切川左岸の赤須村・市場割・小町屋の三ヶ村（現駒ヶ根市）の有志が立ち上がり、中田切川から取水して南原地域の開田を計画しました。「南原開墾の碑」には、安政2年(1855)福沢潤芝(ふくざわじゅんし)等18人が発議し、同5年に役所へ要請したことが記述されています。

田切村はその申し出を断り、その後も平行線をたどる交渉が続きましたが、ようやく明治5年に着工し、明治7年に完成に至りました。

その後昭和53年にかんがい排水事業により改修されました。

2

西天竜幹線用水路

所在地

岡谷市～伊那市

延長

約25km

築造

大正11年～昭和3年

開田

昭和3年～昭和14年

管理者

上伊那郡西天竜土地改良区、長野県企業局

【頭首工】(とうしゅこう)

全長約25kmにおよぶ西天竜幹線用水路の取水口。毎秒5.56トンの水が1,180ヘクタールの農地を潤しています。当時、頭首工の建設が天竜川の水の流れを妨げるものとして、諏訪湖周辺の住民との調整に難航した経過もありましたが、設計変更等により理解を得て昭和28年に工事着工、翌年に完成しました。

その後、天竜川の河川改修に併せて昭和51年に改修されました。

所在地 岡谷市川岸 築造 昭和29年



2-1

【八乙女の水路橋】(やおとめのすいろきょう)

西天竜幹線用水路が深沢川を越えていくために建設された水路橋です。昭和2年11月に完成しましたが、昭和17年に深沢サイフォンが完成したため、水路橋としての役目を終え、現在は道路として利用されています。「箕輪ときめき百選」に認定されています。

所在地 箕輪町八乙女 築造 昭和2年



2-3

4

(きそやまようすい)

木曾山用水

所在地

塩尻市(旧木曾郡榑川村)～伊那市上戸、中条

築造

明治6年 白川取水～権兵衛峠～牛蒡沢～北沢川 延長約12km、昭和43年 白川取水～木曾山トンネル～南沢川、トンネル延長945m

管理者

松本市奈良井川土地改良区、上戸中条水利組合

伊那市と木曾を結ぶ権兵衛峠は日本海と太平洋の分水嶺となっていますが、この分水嶺を越えて木曾から伊那へ水が流れています。約140年間にも渡る試行錯誤の末、明治6年、奈良井川の源流である白川から権兵衛峠を廻る水路が完成しました。一定量の水を確保するために「水樹」(みずます)を造り、明治8年に筑摩県令により協定を結び管理しました。これにより、この水を小沢川に流し、同量の水を再び小沢川から上戸中条井(あがっとなかじょうい)へ取り込むことができるようになり、西箕輪の台地が広く開田されました。その後、昭和34年の伊勢湾台風などでこの水路はたびたび破壊されたため、昭和43年にトンネルによる新水路を作り、旧水路は使われなくなりましたが、現在でも水量を計る「水樹検査」が行われています。「まぼらいな いいとこ 百選」に認定されています。



ごぼう沢の水樹 4-1



トンネル入り口の水樹 4-2

7

(がつざうい)

月蔵井

所在地

伊那市高遠町荊口

築造

弘化4年(1847年)

管理者

荊口総代

高遠藩主の内藤頼寧(ないとうよりやす)は藩財政の建て直しのために、各所に井筋を開いて開田し、税の増収を図りましたが、月蔵井筋もその一つです。三義赤坂から取水し、幅二尺、長さ三里余、月蔵山を越え東高遠に達し、沿線のかんがいに当てるとともに、武家の御用水ともなりました。この建設は全て藩直営で行ったもので、荊口赤坂(ばらぐちあかさか)から東高遠の郷方役所までの間に荊口と板山沢に人夫の泊る小屋を建て、奉行は毎日そこから監督に当たっていました。全線を区間毎に責任者を決めて工事を請け負わせたので、短期間で工事が完了しました。これに従事した人夫は、領内各村のほか、三州、美濃からも来ていたといわれています。記念碑は薬師堂の庭にあり、碑面には当時関係者の名前が刻まれています。



記念碑

10

(よこさわい)

横沢井

所在地

上伊那郡飯島町七久保、上伊那郡中川村枅桐

受益面積

220ヘクタール

築造

明暦2年(1656年)

管理者

七久保枅桐水利組合



横沢井の分水(飯島町七窪神社西) いわれています。井筋

の下流には多くの分水があり水争いが絶えませんでした。

文政7年(1824)、今までの枅による分水方法から時間による分水方法に変更しました。飯島町側は昼分の午前6時から午後4時の間とし、中川村側は夜分の午後4時から午前6時の間としました。このやり方は有効だったようでこれ以降は大きな水争いは起きなかったといわれています。

現在は、七久保宮の上(大宮七窪神社西)において、北の井筋と南の井筋に6:4の割合で水を分けています。

【西天竜開田記念碑】(にしていりゅうかいでんきねんひ)

西天竜幹線用水路と開田事業を記念して建立された碑です。「鍾水豊物」(みずをあつめものをゆたかにす)と記されていて、高さ8m、厚さ60cm、重さ30トンの仙台石で、日本一といわれるほどの巨石。大正11年から昭和3年までの6年余りに水路を築造、その後昭和3年11月に水を通し、約1200ヘクタールが開田される大事業でした。「箕輪ときめき百選」に認定されています。

所在地 箕輪町木下 築造 昭和25年



2-2

【西天竜発電所】(にしていりゅうはつでんしよ)

西天竜幹線用水路建設後30余年、水路の老朽化が進み早期改修に迫られましたが、水田で水を使わない時期にその水を利用して水力発電を行い、売電することでその改修費用を賄う計画が立てられましたが頓挫しました。幾多の問題を乗り越え県営発電事業として着手し、昭和36年に西天竜発電所が完成、発電が開始されました。有効落差／約65m、最大出力／3,600kW

所在地 伊那市小沢 築造 昭和36年発電開始



2-4

5

(つやさぶろうのい)

艶三郎の井

所在地

伊那市荒井

受益面積

約40ヘクタール

築造

明治28年

管理者

横井清水水利組合

明治の中頃、天竜川西の高台では水の利権をめぐる争いが絶えませんでした。用水の必要性を痛感した西伊那村荒井の御子柴艶三郎(みこしばつやさぶろう)は、私財を投げ打って上荒井の広大な畑地に地下水脈を探し求め、明治28年ついに水脈を発見しました。この井戸は思いのほか水量が多く、一帯の約40ヘクタールが水田となりました。

明治33年冬「俺の命は約束通り水神に差し上げる。俺是水神になるのだ。」と遺言を残して艶三郎は自刃しました。現在もこの井戸はこんこんと水が湧き出し、近くには顕徳碑が建っています。「まぼらいな いいとこ 百選」に認定されています。



8

(でんべいいすじ) (鞠ヶ鼻井筋)

伝兵衛井筋

所在地

伊那市富県～東春近

築造

天保4年(1833年)

管理者

伊那市春富土地改良区



頭首工記念碑 8-1



春富井隧道記念碑 8-2

三峰川から富県(とみがた)を経て東春近まで多くの水田を潤すかんがい用水路です。この歴史は明暦元年(1655)、水不足に悩む原新田村が三峰川から取水して開田しようとしたことが始まりでした。村では、佐久の五郎兵衛新田開発に携わった柳沢一族(柳沢弥左衛門)を招いて苦心の末に一旦は万治元年(1658)に完成させましたが、難所だった鞠ヶ鼻(まりがはな)が崩壊、その後も失敗が続き、村は多額の借金を背負ってしまいました。天保3年(1832)、杉島村(現在伊那市長谷杉島)の伊東伝兵衛は原新田村と協議し、高遠藩の許可を得て自費で改修、維持管理を行いました。その管理費として田一坪につき米を一合の十分の一、一村あたり百人以上の人足を出すことなどが反対を集め、未解決のまま伝兵衛は文久2年(1862)に死去しました。高遠藩直営となりましたが、再び管理費問題が激化し、処罰者が出る事件にまで発展してしまいました。

昭和12年に春富井隧道が完成、また昭和33年には高遠ダムが完成したことで、難所であった鞠ヶ鼻を通ることなく水を確保できるようになり、伝兵衛のトンネルは、現在では地中に眠っています。「まぼらいな いいとこ 百選」に認定されています。

11

(りへいていぼう)

理兵衛堤防

所在地

上伊那郡中川村枅桐島

築造

寛永3年(1750年)～文化5年(1808年)

「暴れ天竜」の異名をとる天竜川は古来より氾濫を繰り返し、その度に流域の農地は大きな被害を受けてきました。江戸時代中期、水害に苦しむ地域を救おうと当時地区の名主であった松村家が親子三代(理兵衛忠欣(ただとし)、理兵衛常邑(つねむら)、理兵衛忠良(ただよし))が私財を投げ打ち造った堤防です。度重なる崩壊がありましたが、58年もの歳月をかけて遂に完成した堤防は、天竜川の主流と前沢川の流水と一緒に対岸側に押し返す仕組みでこれにより一千石の農地を確保したといわれています。

理兵衛堤防は築堤以来約200年の間、天竜川流域の農地を守りその役割を担ってきましたが、天竜川の改修工事によりその役目を終えようとしています。その歴史と功績を後世に残すべく、理兵衛堤防を近くの農村公園に移設する計画です。



天の中川橋より撮影



石積みによる堤防